

レポート 連続講座『ふたつの隅田川』

【第4回】花柳壽輔 × 宮本亜門 トークセッション

関連講座「ふたつの隅田川」の最終回（3月2日）は、花柳壽輔氏（日本舞踊花柳流四世宗家家元・「カーリヤー・リヴァー」演出・振付、「清元 隅田川」出演）と、KAAT芸術監督である演出家、宮本亜門氏によるトークセッションが、中井美穂氏の司会で行われました。『隅田川二題』（3月22日・23日）の稽古会場であるKAAT中スタジオで、壽輔先生の初舞台や亜門さんの日舞姿など貴重な写真を映しつつ、刺激的なトークが繰り広げられました。

【注目ポイント！】

壽輔先生が亜門さんにファンレター！

花柳壽輔 × 宮本亜門 それぞれの歩みと接点

幼少のときから日本舞踊を習い、歌舞伎や新派の舞台に触れて育ち、裏千家茶道や仏像鑑賞に夢中になるなど、「日本のもの」からアートに開眼した亜門さん。壽輔先生は、日本舞踊の活動の傍ら、テレビ俳優として『鞍馬天狗』などのドラマ出演、帝劇の現代劇や長谷川一夫の東宝歌舞伎での活躍を経て、去年は日本舞踊とオーケストラのコラボレーションを演出されるなど、常にチャレンジングな活動を続けられています。もともとミュージカル好きで、亜門さんには新作ミュージカル「アイ・ガット・マーマン」でデビューしたときから注目され、博品館劇場での再演をご覧になって、「パンチの効いた素晴らしい舞台」に感心し、亜門さんにファンレターを送ったエピソードを披露されました。



振付師・演出家への道

日舞、役者の活動を続けながら、「振付師になりたい」という夢を抱くようになる壽輔先生。ところが、演出・振付のシステムがあった欧米とは異なり、日本舞踊の世界では「振付家」の仕事がまだ確立されていない時代でした。三島由紀夫、長谷川一夫、武智鉄二ら名だたる目利き・演出家のもとで、古典と前衛両面で役者の経験を積み、その夢を育てていったと語ります。22歳の時、出演したミュージカル「ヘアー」の初日直前に松竹歌劇団出身のお母様が倒れ、「母からのバトンタッチ」と運命的に受け止めた亜門さん。引きこもっていた高校生時代に音楽に熱中し、「音楽に乗せて感動を人々に伝えたい」と思った

お気に入りの場所ニューヨーク

ニューヨークには、最初は長谷川一夫先生と行き、それ以来何十回と訪れている、という壽輔先生。自然を楽しむより、舞台を見るために劇場があるところに旅するのが好きとおっしゃいます。亡き母から「ショービジネスはニューヨークがすごい」と繰り返し聞かされて育った亜門さんは、母からのバトンを受けてニューヨーク修業に出ます。そして、マンハッタンに集う様々な国の人たちが、ミュージカルの客席でエネルギーを結集させて盛り上がるのを観て、「言葉や人種を超えて通じ合うことができる奇跡」をミュージカルに見出すのです。

オペラとの出会い

お二人のもうひとつの接点が「オペラ」です。亜門さんがオペラの“洗礼”を受けたのは20代のとき。ヨーロッパでオペラの舞台に触れ、「我を忘れる興奮」を何度も経験して、夢中になっていきます。これまでモーツァルト三部作をはじめオペラ演出を手掛けている亜門さんは、昨年KAATで実験的なネオオペラ「マダムバタフライX」を演出。今年はリンツで『魔笛』を演出します。壽輔先生は、20代の頃、舞台芸術を志す若手芸術家たちと親交を結び、「スタッフクラブ」という創造集団を結成します。そこには、日本のオペラ界を担っていくことになる栗山昌良、妹尾河童、緒方規矩子、岩城宏之、若杉弘、林光、外山雄三、佐々木忠次といった、きら星の如く華やかな名前が並んでいました。またモーリス・ベジャールとの出会いから、バレエ「ザ・カブキ」の日本側スタッフとして共同作業を行い、海外公演も実現されました。



オペラ「カーリユー・リヴァー」へ

KAATでなにができるか——劇場を観た壽輔先生は「ここでオペラをやりたい」と思われたと語ります。そして、以前から関心のあった、ブリテンが能「隅田川」に触発されて作曲したオペラ「カーリユー・リヴァー」と、歌舞伎舞踊の「隅田川もの」を組み合わせて上演する構想が生まれるのです。今回のオペラ「カーリユー・リヴァー」上演でユニークな点は、オペラの登場人物に、それぞれ歌手と踊り手2人の演者がつくことです。狂女役は、鈴木准氏の歌、篠井英介氏の舞で演じられます。ブリテンが狂女役を男声歌手のために書いたことを受けて、狂女はぜひ「演技力のある女形の舞踊家に」と篠井氏に白羽の矢が立ちました。さらに、オペラでは能を受けて「踊るより舞う」ことに重きを置き、清元での「踊り」とコントラストをつけたいと語られました。

花柳壽輔による「清元 隅田川」、狂女の舞

壽輔先生ご自身は、「清元 隅田川」で「班女の前」を踊られます。「若い頃は形から入ろうとしてテクニックで見せようとしてしまったが、ようやく無心に、母親の感情に入りこんで踊ることができるようになった」と語ります。六世歌右衛門が繰り返し上演した伝説の舞踊を、花柳壽輔の舞で観ることができるこの機会をどうぞお見逃しなく！

「心で踊る・心で歌う」

日本舞踊は型の芸術なので、舞踊家はどうしても形・技術のマスターを優先させてしまうが、本当に重要なのは芝居心であり、「心で踊る」ことだと、壽輔先生は強調されます。同じことが、オペラ、ミュージカル、演劇……すべての表現芸術に当てはまると亜門さん。舞台に立つ人間が「心」で感じていなければ、人の心を打つ表現ができないはずです。さらに壽輔先生は、「舞台はエンターテインメントである」と長谷川一夫先生から学んだ、として、「芸術か否かは観ている方々が決めることであって、われわれはみなさんに楽しんでいただける舞台を作ることが大事だ」と熱く語られました。

～お客様へのメッセージ～

「オペラの演出もKAATも一年生」でわからないことだらけですが、みなさんに感動していただけるような舞台にしたいと、日々稽古しています。ぜひ公演を楽しみにいらしてください。——花柳壽輔

自信をなくしそうな日本人に、「こんなすごい文化、思想を持っていることを誇りに思っしてほしい」——そう願ってKAATではNIPPON文学シリーズをお届けしていますが、この『隅田川二題』でも、すばらしい日本の魅力を発見していただけると思います。ぜひ劇場に足を運んでください！ ——宮本亜門

上演近づく！ 能から生まれたふたつの『隅田川』

チケットかながわほかで好評発売中！！

隅田川二題 ～<オペラ>カーリユー・リヴァー／<日本舞踊>清元 隅田川～
2013年3月22日（金）19:00・23日（土）KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉
【チケットかながわ】045-662-8866（10:00-18:00）